「ならなぎ」活動報告

報告者：　玉尾　洋一

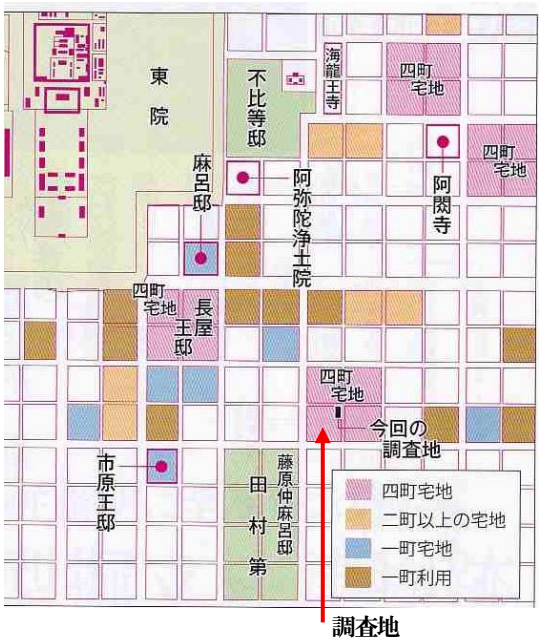
日時	2025年7月13日（日） 13時～15時	天候	晴れ	歴史文化チーム定期活動 音声館	
案内団体または催事名	歴史文化チーム定期活動　第１３回目			人数	大人：　11名

（敬称略）

出席者：吉川、義田、玉尾洋、中澤、山口、池田、奥山、北川、寺尾、中谷、服部
実施内容：13時～15時　　座学

●深掘り発表　13時～13時30分
発表者：北川
タイトル：「舎人親王邸説」を徹底検証（文化庁文化財第二課主任文化財調査官　近江俊秀著より）

・日本書記を編纂した舎人親王は天武天皇の第３皇子で、不比等の薨去に伴い知太政官司に就任。弟の新田部親王と甥の長屋王とともに、皇親政治を主導した人物。
・左京三条三坊の地が舎人親王邸である根拠
①三位以上（藤原不比等、長屋王、新田部親王）の冠位の者は４町が与えられた（藤原京での場合、平城京では基準が残っていないが、それに準ずると考えられる）。
②奈良時代の瓦（瀬後谷瓦窯製）が大量に出土している。瓦葺きはほとんどは寺院、官衛であり宅地には採用されなかったが、一度だけ瓦葺きの住宅の普及を図る政策が舎人親王により行われた。この時期が出土された瓦の年代と符合する。
③瓦葺きの住宅普及政策の際、四町宅地を与えられた人物の中で、存命していたのは長屋王、新田部親王と舎人親王だけである。
④藤原仲麻呂との関係を暗示する木簡が発見されている。左京三条三坊付近から「藤原家」「左京四条二坊」「田村」と書かれた木簡が出土した。仲麻呂は舎人親王の息子大炊王を擁立し、淳仁天皇にしたてあげた。



●寺院建築入門最終回　13時30分～15時
中澤講師

・大仏殿・・・巨大すぎた建物。桁行86m、梁間51mで身舎の梁間は23mもあった。構造的に非常に難しく、唐招提寺金堂が身舎にすっぽりと入る規模だ。「七大寺巡礼私記」では長さ21m、20m、9mの柱を各28本使われていたと記されている。南大門の柱が19mだから巨大さが実感できる。軒の出も7mと非常に大きく、組物は３手先の可能性が高く、文献資料の記載から、薬師寺式ではなく唐招提寺式であろうと考えられる。唐招提寺式では通肘木があり、構造的に強い。しかし無理して建築しているので構造的な不具合も多く、実忠は強化するために、長さ22m、幅65ｃｍ、厚さ40ｃｍの柱を40本追加している。さらに天井の切り上げや大仏を支えるための、山を築いたりしている。
江戸時代に再建されているが、両脇２間がカットされ桁行七間と縮小したとは言え、問題は材料不足であった。その課題を解決するため、細い柱を中心として、その外側に台形の断面の木を貼り合わせて金輪で止めることで、最大156ｃｍもの太い柱とした。しかし梁間は１本の巨大な木材でなくてはならず、ようやく日向で見つかったと記録にある。現在あるのは江戸時代再建されたものだが、明治時代軒

が下がり四隅につっかえ棒をしており、軒先のラインは波打っていた。大改修が明治時代と昭和にされて今日に至っている。

・鐘楼・・・鎌倉時代に建てられた鐘楼が現存している。重源のあと、栄西が大仏様と最新の建築法禅宗様を駆使して建てた。この技術が同居する建築としては、稀有である。組物に特長がある。古代建築では組物は柱の上に置かれていたが、禅宗様では、組物と組物の間の「中備」の位置にも組物を置く。通常柱の上に「台輪」という横材を置いて、その上に組物を載せるのだが、鐘楼ではその台輪がない。組物は四手先で尾垂木はない。二段目と四段目に肘木の先端が尾垂木のように斜めに突き出しているが、単なるデザインである。

●以上で寺院建築入門は終了しました。中澤講師ありがとうございました。
次回開発勉強会「仏像鑑賞入門」がスタートします。
日時：8 月 10 日（日）13 時～
場所：はぐくみセンター

以上

(気になった点、引継ぎ事項)